

**\*第二演習・2015年度前期\*\*\*\*\***

**A. 予定** (同学年は五十音順)

第三演習室：

隔週・2コマ → 1コマ1人

60分の発表+30分の質疑応答

担当者は資料を準備の上、発表。パワーポイント使用可。

	担当者1	担当者2
5月14日		
5月28日		
6月4日		
6月11日		
6月25日		
7月2日		
7月9日		
7月16日		

**B. 関連するプログラム**

1. 研究室紀要の刊行：3月刊行
  - ・第二演習での発表 → 論文、書評、サーベイ
2. 特別研究発表会：年2回、8月28日（金）+29日（土）と2016年3月
  - ・学会発表の予行+書評・サーベイ
  - ・原則的には：大学院生全員が参加（博士後期課程だけでなく）

**C. その他**

- ・飲み物の準備：担当M

数種類の飲み物を準備する（種類はMで相談）。紙コップあるいはマイ・コップ。

- ・夏期の研究発表会の8月29日（最終日）は、食事会。

**\*研究の基礎としての書評・サーベイ\*\*\***

研究の条件：テキスト（書かれたものとはかぎらず）の厳密な読解

問題を的確に立てること（先行研究の分析・整理）

先行研究の全体動向+直接参照すべき研究の徹底的な検討

論証すべきテーゼの明確化とその説得的な論証

↓

すぐれた研究をモデルにすること。書評の意義=訓練としての書評。

書評：ハンス・キュンク著（片山寛訳）『キリスト教思想の形成者たち——パウロからカール・バルト』新教出版社、2014年。→ 『本のひろば』2015.2

芦名定道

ハンス・キュンク（一九二八年—）は、二十世紀後半を代表するカトリック神学者の一人であり、現在に至るまで、神学界から世界へと積極的な発言・発信を続けているキリスト教思想家です。スイスに生まれ、カール・バルトの義認論で博士学位を取得、第二バチカン公会議で活躍しましたが、その後教会論や教皇無謬論をめぐる教皇庁との軋轢によってカトリック神学部から追放される中、エキュメニズムを推進し宗教間対話や世界倫理を提唱するなどの活躍を続けています。まさに、キュンクの発言には現代キリスト教の証言者としての重みを感じられます。

このたび、キュンク著『キリスト教思想の形成者たち』が、優れた邦訳によって出版されました。これは、キリスト教思想史を通した神学入門（「神学への小さな入門書」と言うべき書物であり、これによってキュンクは、体系的思想の巨匠が一流の思想史家でもあることを——バルトやティリッヒがそうであったように——、実演した言うことができるでしょう。取り上げられる思想家は、パウロ、オリゲネス、アウグスティヌス、トマス・アクィナス、ルター、シュライエルマッハー、バルトという選び抜かれた七人ですが、読者は、キュンクの目を通して、キリスト教思想史の豊かな展開に触れることができます。

もちろん、これら七人はキュンクの個人的な好みだけで選ばれたわけではありません。本書が描くキリスト教思想史のキーワードは、パラダイム（思想史の一つの時代を前後から区別しその時代を特徴付け、時代の思想家たちに共有された思考様式・問題系）ですが、キュンクは、キリスト教史をパラダイムの交代・転換のプロセスとして叙述しています。それは、キリスト教思想を時代状況との相関において捉える試みであり、そのパラダイムを生み出し体現した思想家が、先に挙げた七人だったのです。つまり、パウロは新約聖書的キリスト教的パラダイムに、オリゲネスは古代キリスト教的パラダイムに、アウグスティヌスは西方キリスト教的パラダイムに、トマス・アクィナスは中世的スコラ的パラダイムに、ルターは宗教改革的パラダイムに、シュライエルマッハーは近代キリスト教的パラダイムに、そしてバルトはポスト近代的パラダイムに対応する人物として描かれています。それぞれの思想家についての叙述は明解かつ洞察に満ちており、そして何よりも思想家の評価が公平であることが本書の魅力です。たとえば、「ルターの正しかった点」と「ルターの宗教改革の問題をはらんだ帰結」（222～228頁）をご覧ください。

さらに、本書の優れた特質として、それぞれの思想家を年表や注を交えて説得的に紹介する——この点で本書は行き届いた入門書です——だけでなく、そこに現代的視点を反映させていることが挙げられます。たとえば、キュンクはアウグスティヌスやトマス・アクィナスを論じる際に、両者の女性理解を批判的に検討しています（133～135、176～181頁）。またバルトを論じる中で、ボンヘッフアー、ティリッヒ、ブルンナー、ブルトマンらに触れることによってバルトを相対化することを、キュンクは忘れていません（特に、「なお残る挑戦——「自然神学」の箇所において）。

現代のキリスト教思想は多様な動向、多岐にわたる問題が入り乱れ、いわば渾沌とした状況にあります。キリスト教会自体を取り巻く現実もきわめて複雑です。本書のエピローグで、キュンクは「時代にかなった神学プログラム」を提示することによって、現代のキ

リスト教神学の進むべき道を示そうとしています。日本のキリスト教が直面する複雑な問題状況は、まさに「時代にかなった神学への指針」を必要としています。こうした中で、本書に描き出されたキリスト教思想史のマクロな視点が、問題解決の重要な糸口となることは疑いありません。このキュンクの「神学への小さな入門書」は多くの読者の期待に応える必読の一冊となるでしょう。 (あしな・さだみち 京都大学大学院教授)

・「研究サーベイ論文」をまとめること

実例： 矢内原忠雄研究についての研究サーベイ論文

岡崎滋樹「矢内原忠雄研究の系譜——戦後日本における言説」(『社会システム研究』第 24号、2012 年、223-262 頁。<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/ssrc/result/memoirs/kiyou24/24-11.pdf>)